



特定非営利活動法人

アジア太平洋資料センター (PARC)

2011 年度 活動報告書



—2011 年度をふりかえって—

震災と原発事故を経て 脱原発・脱成長の社会を創るために



2011年3月11日、東日本大震災が東北3県を襲い、それに続き福島第一原発事故が発生しました。震災と原発事故は、数万人規模の犠牲者・行方不明者を出し、家や仕事を多くの人から奪いました。また被災地の地域社会は物理的にも、人と人との関係という意味でも引き裂かれました。震災と原発により日本社会のすべての人が大きな打撃と不安と直面したといえるでしょう。

PARC にとっての 2011 年度もまた、日々の活動から組織としての方針に至るまで、震災と原発事故の影響を受けた 1 年でした。これまで経験したこともない災害と原発事故に直面し、混乱の中で考え、また課題にぶつかり、新たな取り組みを行なうという 1 年でした。

原発を生み出してきた社会背景には、戦後直後の米国をはじめとする国際的なパワーバランスの中での日本の選択があり、また高度成長期における経済的豊かさの追求がありました。東京という大都市一極集中のしくみは、政治・経済・社会のあらゆる面に及び、その中で都市は農村から人やモノや文化を奪ってきました。この犠牲の上に経済的・物質的な豊かさが存在するという、いびつな構図が何年もかけてつくられてきたのです。農業・漁業という、土地と自然に結びついた営みは周辺に追いやられてもきました。このように、経済的な豊かさや利便性のみを追い求めてきた日本社会の象徴の一つが「原発」であると、私たちはとらえています。

今回の事故以前から、反原発運動・反核運動を地道に行なってこられた団体・個人は数多く、PARC 会員の中にもその主体として関わる方も多くいます。PARC も微力ながら、賛同や集会参加という形で関わってはきました。しかし今回、多くの方々が「なぜ人々の力でもっと早く原発を止められなかったのか」と感じられたように、私たちも歯がゆい思いを噛みしめました。

今後、日本でも世界でも、二度とこのような事故とそれに伴う放射能汚染が起こらないように、原発を生み出す社会・経済構造そのものを、持続可能で人間らしいあり方に展開していくために、私たちは「脱原発」「脱成長」を活動の中心的な方針にすえました（2011 年度会員総会にて提案、採択）。この理念をどのように実体化していくか、どのようにして多くの人たちと社会を変革していくか、2011 年という年は、その始まりだったと考えています。

2011 年度は、脱原発デモや集会、政府への申し入れを行なうと同時に、宮城県の震災被災地や、福島県の原発事故後の被害にあっている方々（特に有機農業者たち）と直接に話を聞き取り組みを行なってきました。被災地では復興に乗じた新自由主義的な構造改革が進められる危険があり、TPP 参加もその文脈の中で提案されています。また放射能汚染という恐るべき脅威を、さまざまな立場の分断を越えてどのように解決していくか、原発事故の責任が曖昧とされる中で、いかに政府や東電の責任を追及していくか、悩みながらの活動は続いています。

こうした課題を多くの人びとと共有しながら、また会員の皆さまからも、さまざまなご提案や情報提供、参加をいただきながら、次年度にはさらに大きな 1 歩を踏み出したいと考えています。さらなるご意見・ご提案・ご参加をお願い申し上げます。

こうした課題を多くの人びとと共有しながら、また会員の皆さまからも、さまざまなご提案や情報提供、参加をいただきながら、次年度にはさらに大きな 1 歩を踏み出したいと考えています。さらなるご意見・ご提案・ご参加をお願い申し上げます。



PARC の姉妹団体パルシックが支援する宮城県石巻・十三浜の漁村。ワカメの種付けを行なう

アジア太平洋資料センター 理事会

脱原発・脱成長の社会へ



2011年4月の野菜デモ(渋谷)

◆被災地への支援物資送付と視察

東日本大震災後の3月22日から5月末までの約2か月、PARCは被災者の生命や生活を守るための支援活動として、支援物資送付プロジェクト「小さな思いをいっぱい届けよう！」を実施しました。

このプロジェクトを始めるきっかけとなったのは、PARC会員や受講生の方からの、「被災地に支援物資を送りたいけれど、マスク数枚、缶詰が数個だけだとなかなか送れない」という声でした。

確かに、個人宅では同種類の物資を大量に送ることは難しく、せつかくの思いがなかなか被災地支援に結びついていなかったのです。そこで「缶詰1個でも、マスク1枚でもいいので送ってもらい、PARCで仕分けした後、信頼できる団体に託して被災地に送る」という形をとりました。この呼びかけに、たくさんの方々から支援物資をいただきました。また物資を送る際の送料・その他経費に充てるカンパも合計で約55万円集まりました。さらに事務所で物資を仕分けする「仕分けボランティア」を呼びかけたところ、述べ49名もの方々からの参加を得ることができました（これまで市民活動等には参加したことのない層が大半）。

これら支援物資を直接被災地に運ぶこと、また被災地の実態を把握したいとの思いから、4月上旬に事務局スタッフ3名で宮城県石巻市、女川市、南三陸町等に赴きました。ここでは下着や靴下、食品などを直接被災者に届けた他、壊滅的な被害を受けた漁村や海沿いの集落、避難所、支援の網から漏れ落ちているグループホーム等を訪問しました。アジアからの研修生が多い地域である南三陸町では、地域に根ざして活動する外国人女性たちのグループの方々とも会い、被災状況やいま求められる支援のあり方についてお話をうかがいました。



送っていただいた支援物資であふれるPARCの1F

◆脱原発の講演会・アクションを次々と実施

一方、4月になっても原発事故は収束せず、政府見解やマスメディアからの情報も不十分なままでした。首都圏では多くの市民が「原発はいらない」という声を起こし始め、脱原発運動が一気に広がりました。こうした中で、PARC自由学校受講生の有志は、「野菜にも一いいわせて！さよなら原発デモ」を企画、4月と5月に渋谷にて脱原発デモを行ないました（PARCも全面的に参加し、4月には1500名の参加者）。「風評被害」（実際には東電による実害ですが）を受けた福島・千葉の農家や、野菜の立場から脱原発を訴えるというこのデモは、多くの人たちからの支持を得て、その動きは広がっていきました。この時期以降、各所で1万人規模のデモや、数百人規模の脱原発集会なども積極的に開催され、PARCも会員や受講生に呼びかけて参加しました。

PARC独自には、「さよなら原発 緊急連続企画」を5月中旬にほぼ毎週開催し、9月にはシンポジウム「脱原発社会は可能だ」を開催しました。5月の連続企画には毎回100名以上が、9月のシンポには約400名以上が参加し、キャンセル待ちが出るほどでした。こうした企画の数々は、緊急の事態に際して、一人でも多くの人たちに呼びかけ、脱原発の大きなうねりをつくるための取り組みでした。

連続企画が続く中での6月末のPARC会員総会では、震災や原発事故に対する活動として、「もっと積極的に脱原発アクションに取り組むべき」との会員からの意見が出され議論を行ないました。「東電株主運動」のメンバーでもあるPARC会員から、7月初旬の「東京電力株主総会」への働きかけも提起され、実際に数日後の株主総会当日、福島からの人たちと共に、スタッフ・会員が株主に向けてのアピールを会場入口付近にて行ないました。

東電株主総会会場。『オルタ』の脱原発イラストをアレンジしたバナーを手に訴えるゲル編集長（写真中央）



● PARC が主催・共催した脱原発講演会・シンポジウム ●

5/6	岡村淳さんリベンジ上映会&トークライブ！ 「福島から、NO MORE NUKE の叫び！」
5/11	活動家一丁あがり！緊急シンポジウム 「東日本大震災から2カ月—いま、私たちにできること」
5/13	田中優さん講演会「脱原発は可能だ！持続可能エネルギーで創る地域の未来」
5/18	徹底トークライブ！青木理×川端幹人 「権力と電力—知られざる巨悪の構造！」
6/4	シンポジウム「そこで働いているのは誰か—原発労働の実態に迫る！」 樋口健二（写真家）/風間直樹（週刊『東洋経済』記者） 蓮池透（元東京電力社員／拉致被害者家族）
6/23	会員総会シンポジウム「脱原発・脱成長の地域をつくる—食・農・暮らしを結び直す」 糸長浩司（飯館村後方支援チーム代表）/菅野正寿（NPO ゆうきの里東和ふるさとづくり協議会理事）/足田美津子（しらたかノラの会／山形県白鷹町）
9/23	シンポジウム「脱原発社会は可能だ」 小出裕章（京都大学原子炉実験所助教）/吉原毅（城南信用金庫理事長） 纈纈あや（映画監督）/明峯哲夫（農業生物学研究室主宰）

◆アジア・世界から原発と核をなくすために

原発は日本だけでなく、世界各国にいまも存在します。また日本の原発の資源ともなっているウラン鉱山の開発と、それに伴う現地の先住民族の被害は深刻です。さらに日本政府は、これまでもアジア諸国への原発輸出を推進しており、福島原発事故も方針を変えていません。PARCは、アジア・世界の人びとと連帯する NGO として、原発を日本国内だけの問題ではなく、世界の原子力・核開発の問題ととらえ、またそこには経済的な格差や開発・人権など複雑な問題が構造的に存在していると位置づけ、以下に取り組んできました。

2011年7月、アジアの反核・反原発のアクティビストによる「NO NUKES ASIA FORUM」が、福島第一原発事故を受けて、東京で開催されることになりました。PARCは同実行委員会に参画し、インドネシア、韓国、タイ、ベトナムからの参加者とともに世界の原発や核開発問題を共有し、また福島第一原発事故後の状況を議論しました。福島からの避難者や子どもたちを放射能から守るネットワーク関係者もスピーカーとして参加し、アジアレベルで反原発・反核運動を広げていく必要性を確認しました。

2012年1月の「脱原発世界会議 2011」には賛同団体として参加。この際に来日していたヨルダンの国会議員 2名と弁護士をゲストに、緊急集会「原発？ No, thank you！ ヨルダンの国会議員・弁護士は訴える」を開催しました（「ミーダーン パレスチナとの対話」等との共催）。

ヨルダンは、日本政府が原発を輸出しようとしている国の一つですが、水資源が限られ政情不安定でもあることから、原発を持ち込むことは危険です。事実、多くの国会議員が反対しているにもかかわらず、日本・ヨルダンの政府間交渉は進められています。このシンポジウムでは、輸出反対の立場をとる国会議員と弁護士を招き、市民社会側から日本政府に対して輸出を止めさせるための戦略や具体的な方法論について多くの意見交と議論を行ないました。

また原発の燃料となっているウランがどこからどのように調達されるのか、実は多くの人たちは知らされていません。PARCは1998年に、オーストラリアのウラン鉱山開発により被害を受ける先住民族アボリジニの声を伝える映像作品『ジャビルカー 私たちの電気がアボリジニの大地を壊す』を翻訳作品としてリリースし、問題提起を行ってきました。今回の原発事故を受けて、この作品の監督・デイビッド・ブラッドベリ氏の最新作品『ハードレイン パンドラの箱から降り注ぐ放射能』を翻訳し、オリジナル作品とともにリリースしました。この作品は『ジャビルカー』同様、ウラン鉱山開発の実態や、世界の原発推進派の「ウソ」に対して反駁していく作品で、こうした優れた作品を迅速にリリースできたことは世界の原発問題を考える上でとても重要でした。

◆情報発信

原発事故後、私たちが最も迷ったのは、多くの人たち同様、「正しい情報はどこにあるのか」ということでした。PARCはこれまでのネットワークを活かして、信頼できる研究者・ジャーナリスト・実践者・NGO・活動家から情報や見解を得ながら、日常的に運営している各部門の中で「脱原発」を推進するための情報発信に努めてきました。前述した AV 翻訳作品に加え、オリジナル作品『原発、ほんまかいな』のリリースや、雑誌『オルタ』での特集、また自由学校での秋の緊急連続企画「原発を生み出す社会とたたかう」の開講などです。

これらの活動については、多くの会員・受講生が参加や広報協力をしてくださったことで、活発な議論の場が生まれました。

今回の事故が引き起こした問題は複雑で、かつ多岐にわたっています。また脱原発への道のりも、さまざまな選択肢と議論があり簡単ではありません。今年度の経験をもとに、2012年度、PARCとしての脱原発の活動を絞っていく必要も感じています。2012年度の会員総会では、多くの会員の皆さまからの提案をいただきながら、議論を進めていきたいと考えています。

TPP では生きられない！



2011年、ホノルルで開催された APEC でのデモ。
「TPP に反対する人々の運動」メンバーとして参加

◆東日本大震災と TPP

2010 年秋、菅直人首相（当時）が、突然に表明した TPP(環太平洋戦略的経済連携協定)に対し、まずは農民・漁民を中心とした反対運動が立ち上がりました。PARC は、2010 年 12 月に発足した「TPP に反対する人々の運動」に団体として参画し、集会開催やデモ、TPP がよくわかる 100 円パンフレットの制作・販売などを担ってきました。TPP 推進の声がマスメディアや財界などから強まる中、さらに幅広い分野からの参加を得て反対運動を行なおうとした 2011 年 3 月、東日本大震災が起きました。震災と原発事故の対応に政府は追われる中で、TPP 参加は一瞬、背景に追いやられた印象がありました。また反対運動の側も被災地支援や反原発運動に取り組んだため、2011 年 3 月～5 月の間は積極的な活動ができずにいました。

しかし、政府・財界からは震災からの復興を論じる中で、大規模化・集約化された「強い農業・漁業を」という意見も飛び交い、その文脈の中で「TPP への早期参加」を求める勢力も存在していました。これは「震災復興」に便乗した構造改革・新自由主義的な「改革」であり、まさに「ショック・ドクトリン」（ナオミ・クライン著『ショック・ドクトリン』）ともいえる動きです。また震災・原発事故対応の渦中にあっても政府レベルでは TPP 参加への動きが着々と進められていることも明らかになりました。

こうした状況の中で、2011 年 6 月以降は TPP 反対運動の側も新たな動きを生み出し、何としても参加を阻止するために動き出し、PARC もそこで中心的な役割を果たしてきました。

◆国内のネットワーク拡大により参加阻止を

2011 年 2 月以降、「TPP に反対する人々の運動」は、集会・デモ・講演会を開催してきました（詳細は 2010 年度活動報告を参照）。2011 年度は、定期的な学習会開催や「TPP パンフレット」をさらに広げ、PARC は学習会企画やパンフレット制作・販売も担ってきました（おかげさまでパンフレットは約 2 万部を販売）。

しかしながら 2011 年 11 月の APEC 直前、野田首相が

実質的な「TPP 参加」を表明して以降は、TPP 反対の運動もこれまで以上の取り組みを迫られました。2012 年 2 月以降、「TPP に反対する人々の運動」が中心となり、生協や労働組合、農業団体、医療関係団体、国際 NGO、NPO、市民運動等、多様な団体・個人がゆるやかに連携しあえるプラットフォームづくりに着手しました。多くの団体がすでに TPP 反対を表明し、独自の反対運動を展開しており、また脱原発運動の流れとも時に重なりながら、緩やかな連携もとられつつあります。しかし、政府・財界が推し進めようとする TPP 参加の流れを押しとどめるためには、こうした力を一つにまとめアピールしていく必要があります。各団体への呼びかけや会議を進めており、2012 年 4 月以降に大きな動きを計画中です。PARC はこのプラットフォームづくりに関しても、団体への呼びかけや調整を分担して行ない、中心的な役割を担ってきました。

◆“99%”がつくるグローバルな連帯

国内の農民や生協、市民団体が中心に行なってきた「TPP に反対する人々の運動」にとって、2011 年度はその連帯の輪を国際的に広げた飛躍の年でした。

7 月、ニュージーランドの研究者であり反グローバリズムの論客としても知られるジェーン・ケルシーさん来日（招聘は「TPP を考える国民会議」）の際、「TPP に反対する人々の運動」は「NGO・市民運動との戦略会議」を行ないました。ケルシーさんと PARC は、1997 年の郵政民営化・規制緩和問題や、WTO や APEC 等の国際会議で協力してきた友人であり、今回の来日の際に改めて TPP 問題での協力・連携を確認しあうことができました。

11 月の APEC 直前、国際ネットワークの中では日本の TPP 参加表明が注目されていました。アジア太平洋地域の政府要人やマスメディアがハワイ・ホノルルにて会議を予定している一方、運動の側もホノルルで「MOANA NUI（先住民族マオリの言葉で「大海」）会議」という対抗のための民衆会議を計画していました。ここには、TPP に限らず、大企業や一部の強国が支配する開発・金融・貿易の



あり方に「NO」を突きつけ、持続可能なアジアをめざす
実に多様な人たちが集まりました。例えば、ハワイやグアム
で米軍基地反対運動を行なう先住民、伝統的な農業
(無農薬・有機農業)の実践者、米国のNGO、韓国の平
和活動家などでした。「TPPに反対する人々の運動」は国
際的なネットワークの一員として、この会議への参加を決
め、計13名の市民派遣団を組織しました。PARCからは
内田事務局長が参加し、事前の会議企画や現地コーディネ
ートを行ないました。

「MOANA NUI 会議」では、メインセッションにて TPP
がテーマの一つとなり、「人々の運動」メンバーがパネリ
ストとなり、ジェーン・ケルシーさんらとともに、TPP
に代表される自由貿易協定の問題点をアジアレベルで共
有するとともに、国際的な抵抗運動の必要性を確認しまし
た(写真左。APEC 市民派遣団の詳細な報告書は「TPP に反対す
る人々の運動」のウェブサイトをご覧ください)。

また APEC 会議に対するデモも開催され、観光地として
名高いホノルルの高級ホテル・リゾート地域を約 2000 人
が歩きました。2011 年 9 月にニューヨークで始まった
「OCCUPY ウォール街」運動は、ホノルルにも飛び火し、
APEC 以前から「OCCUPY ホノルル」の名で路上での占
拠運動が現地の若者を中心に行なわれ、反 APEC デモにも
連携して多くの人々が参加し、「99%」の声を訴えました。

APEC への参加により、「人々の運動」としては、反 TPP
運動への視座がさらに深まりました。例えばハワイの先住
民族の抵抗の歴史や、また有機農業に取り組む人たち、農
民や漁民による反グローバルイズム運動は、いずれも私た
ちが日本国内で行なう活動と通底し、めざすべき社会のあり
方を共有しています。PARC にとっても、これらの運動と
呼応し、オルタナティブな世界を構想する上で、また国内
での活動を進めていく上でも大きな成果となりました。

2011 年末以降、TPP 参加国と日本政府との個別交渉が
始まると、民主党内の反対勢力や参加に反対する市民団体
の動きも活発になりました。「TPP を考える国民会議」は
2012 年 3 月、米国やニュージーランド、韓国などから、
国会議員や研究者らを招き、TPP に反対する講演会や議員
学習会などを開催しました。その折に、「人々の運動」も
招聘に関するコーディネートを協力、市民国際シンポジウ
ム「やっぱり TPP では生きられない！」を開催しました。

PARC もまた、海外ゲストとの交流や議論などの場で主要
な構成団体としての役割を果たしました。このシンポジウ
ムでは、米国の NGO 団体「Public Citizen」よりロリ・
ワラックさん、ピーター・メイバードックさんを招き、ア
ドボカシー・政策提言団体として WTO や NAFTA, TPP に
対して警鐘を鳴らしてきた経験を聞きました。またすでに
米国との間で FTA を締結した韓国からは、韓米 FTA 阻止
汎国民運動本部の朱帝俊さんが韓米 FTA の実態と反対運
動を語りました。実質的には「日米 FTA」とも呼ばれる
TPP の反対運動にとって隣国・韓国での経験は非常に学ぶ
べき点が多く、また運動としても連携していくことの重要
性を感じました。

◆ TPP の密室性を問う —情報公開請求と市民意見交換会

TPP 交渉については、他の貿易交渉にも増して、その密
室性の問題が指摘されています。条文さえ 4 年間は非公
開という事態に、多くの市民が不満を感じ、またこのよう
な非民主的な手続き自体へ疑問を抱いています。

2012 年 2 月、こうした観点から、また首都圏以外の地
域での TPP 反対運動を広げていくため、PARC の友好団
体である「AM ネット」が「TPP 協議に関する情報公開と
市民参加に向けての申し入れ」を計画し、PARC も呼びか
け団体になりました(114 団体が賛同)。さらに続いて同
じ呼びかけ団体が、より開かれた情報公開と議論の場とし
て「TPP 協議に関する市民参加の意見交換会」の開催を内
閣府国家戦略室へ要請。この動きは、進行中の交渉内容を
明らかにするという目的はもちろんのこと、政府側と市民
側が同じテーブルにつき議論や政府への質問を行なうこ
とを、多くの市民に公開することで、TPP の密室性や、私
たちの暮らしに与える負の影響について知ってもらうこ
とを目的にしています。この意見交換会は 2012 年 5 月
に開催予定です。

2011 年度末の段階で、TPP への参加は先行きが不透明
ですが、さらに大きく参加反対の取り組みを進めていく必
要があります。

水はみんなのもの —国際水映画祭 2011 の開催



世界の人口増大や中国・インドなどをはじめとする国ぐにの経済発展に伴い、水の需要は増大をたどる一途です。一方で、人類が使用できる淡水の量は限られているため、国家間・地域間での水をめぐる争いも生じており、「これからは石油でなく『水戦争』の時代」ともいわれています。さらにこうした水不足とも重なりながら、アジア・アフリカなどの国では水道事業の民営化が推し進められ、水道料金の値上げや水道設備利用可能時間の減少など、その弊害が貧困層に直撃する状況にあります。ペットボトルの水に代表される水の商品化も世界中に広がっています。公共財であるはずの水が、一部の多国籍大企業によって私有化され、その弊害はもっとも貧しい層の人たちの暮らしを直撃しているという構造は、いまも解決されていません。

こうした問題をより多くの市民に発信し、ともに問題を考えるために、PARCは2011年12月3日・4日の2日間、「国際水映画祭 2011」を他団体とともに開催しました。世界規模の水資源の枯渇や民営化・商品化、開発などの現場を丹念に取材・調査しまとめられた国内外の優れたドキュメンタリー映像作品21本を上映し、私たちの暮らしと水のかかわりを知っていただくことを目的にしました。また、3月11日に起こった東日本大震災と東京電力福島第一原発事故の際、大量の放射性汚染物質が河川・海に流されるという事態を受け、急きよ「原発と放射能」というテーマでの作品上映も行ないました。

開催期間中は、国連大学の2つのホールでの映画上映の他、セミナー・ルームでの教材づくりワークショップや、インドからのゲストを招いての特別セミナーを行ないました。さらに国連大学に併設されている地球環境パートナー

シッププラザにて写真展示や手づくり T シャツワークショップを行なうなど、水をテーマに多角的な発信を行ないました。映画祭には、2日間で述べ420名の参加者があり、盛況のうちに終わり、事後のアンケート調査では、幅広いテーマの映画上映に対して高い評価が得られました。この映画祭を通して、広く水に関するテーマを伝えられたことは大きな成果でしたが、さらに PARC にとっては、オーディオ・ビジュアル部門の一環として優れた海外の作品を紹介・商品化するためのしくみを構築できた点が大きな世界です。さらには、インドにて同様の映画祭「Voices from Water」を開催している主催者との連携も、水問題に関する国際連帯の一つです。この映画祭は次年度も継続して開催する予定ですが、インドとの同時開催も計画中です。

【上映作品】

●テーマ①：アジアの開発と人びとの暮らし

- ★ナルマダ・ダム5年（1996年/インド）
- ★ムン川の経験-メコンの暮らしとダム（2010年/タイ・日本）
- ★水になった村（2007年/日本）

●テーマ②：グローバル化と水の民営化・商品化

- ★ブルー・ゴールド-狙われた水の真実（2008年/米国）
- ★A World without Water（【日本初公開】2006年/英国）
- ★Tapped（【日本初公開】2009年/米国）

●テーマ③：わかちあう海の恵み

- ★食卓と海-水産資源を活かし、守る（2009年/日本）
- ★海盗り一下北半島・浜根根一（1984年/日本）
- ★祝の島（2010年/日本）
- ★Red Gold（2007年/米国）

●テーマ④：紛争・占領地における水といのち

- ★浸蝕-イスラエル化されるパレスチナ（2009年/日本）
- ★アフガンに命の水を〜ペシャワール会 26年目の闘い〜（2009年/日本）
- ★ブンジ/PUMZI（2009年/南アフリカ・ケニア）

●テーマ⑤：海・川・森と暮らしのつながり

- ★濁りゆく海-グレートバリアリーフの生と死（2003年/豪州）
- ★ミシシッピ（2009年/米国）
- ★石おじさんの蓮池（2005年/台湾）
- ★海と森と里と-つながりの中に生きる（2010年/日本）
- ★恵みの雨（2003年/インド）

●テーマ⑥：特別企画 原子力と放射能汚染

- ★世界は恐怖する-死の灰の正体（1957年/日本）
- ★ブッダの嘆き-ウラン公害に立ち向かう先住民（1999年/インド）
- ★アレクセイと泉（2002年/日本）

★日時： 2011年12月3日（土）～4日（日）

★会場： 国際連合大学

■主催：国際水映画祭実行委員会

アジア太平洋資料センター（PARC）/アース・ビジョン組織委員会/メコン・ウォッチ/国際有機農業映画祭運営委員会

■後援：一般財団法人 セブン-イレブン記念財団

■協賛：国際連合大学（UNU）

■協力：株式会社シグロ/有限会社アップリンク/有限会社ポレポレタイムス社/パタゴニア



国際ネットワークの広がり



マレーシアで開催された「アジア連帯経済フォーラム」

2011年度は、組織分割をして4年目を迎える年であり、これまでつながりが弱くなっていた海外とのネットワークづくりや協働の取り組みに力を入れてきました。震災の影響で必ずしも計画通り進まなかった面もありますが、国際ネットワークを有する団体として、いくつかのテーマにて具体的な関係づくりや協働が実現できたことは大きな成果でした。

◆アジア連帯経済フォーラム

2007年に第1回目の「アジア連帯経済フォーラム」がフィリピン・マニラで開催され、その後2009年の東京開催を経て、今回は3回目のフォーラムとなりました。11月1日～3日まで、マレーシアのクアラルンプールにて、アジア十数力国から約300人が集まり、アジアにおける連帯経済の実践・研究の両面の交流と議論を行いました。日本からは、第1回フォーラムから参加してきた西川潤さん(早稲田大学名誉教授)と内田事務局長が参加し、日本国内での連帯経済セクターの概況と課題を報告しました(詳細は『オルタ』2012年3.4月号参照)。アジアからの参加者の多くは、福島第一原発事故後の状況について大変関心が高く、福島はもともと有機農業や地産地消の取り組みが盛んであったこと、また宮城や岩手などでは、環境と文化に根ざした漁民の協同組合や生協運動が活発であったことなどを伝えると、大きな衝撃を受けていました。また現在進んでいる「復興」のあり方が、必ずしもこれら小さな経済活動を推進するものでなく、むしろ大規模化・集約化された形での復興であったり、「復興」に乗じた市場経済主義の強化や構造改革路線の強化にもつながっているとの報告も行なった上で、連帯経済がこうした動きをいかに規制していくか議論をしました。

アジア連帯経済フォーラムは第1回目からPARCが関わっている重要なネットワークですが、第3回目を迎え議論の深まりや参加メンバーの多様化など、充実してきています。今後も引き続き参画していきますが、国内での実にさまざまな事例の調査や、それらを体系的に整理できていないことが、日本側の課題として残っています。

◆脱原発とグローバル経済への規制と批判

7

TPP参加反対の活動や、国際水映画祭開催などを通じて、PARCの国際ネットワークも広がりました。TPP参加反対の取り組みでは、ニュージーランドのジェーン・ケルシーさんを中心とした団体との交流が生まれています。また米国のNGO「Public Citizen」のロリ・ワラックさん、さらにはホルル APEC でのハワイにおける先住民運動や反基地運動の担い手との出会いもありました。2011年度はPARC自由学校でグアム・エクスポージャーツアーも成立し、現地のNGOや平和活動家の案内でグアムの米軍基地問題を掘り下げることができました(事務局スタッフ・小池が参加)。このツアーはぜひ継続的に開催したいと考えています。また3月にはグローバル化の中で影響を受ける先住民の暮らしの現場を調査するため、メコン・ウォッチの協力を経て、ラオス調査を実施し交流を広げました(事務局スタッフ・田中が参加)。

さらにオーディオ・ヴィジュアル部門のオリジナル作品としてリリースした『原発、ほんまかいな』が、韓国語版に翻訳されました。PARC自由学校「活動家一丁あがり！」講座の第一期受講生で、韓国の「エネルギー正義行動」というNGOに就職した方からの提案で実現した企画です。韓国も数回の上映会が開催されており、福島第一原発事故を受けての日本の草の根から発信できたこと、またPARC自由学校から生まれたネットワークによって実現できたことは大きな成果です。

韓国との交流という点では、2012年2月、もともと韓国の活動家・弁護士でありPARCにも30年以上も前に訪問されたこともある朴元淳さん(現ソウル市長)が日本訪問時の忙しい中、PARCを訪問されました。ここでは震災と原発事故後の日本の状況について、また韓国の社会運動と政治の関係などについて短い時間でしたが意見交換を行ないました。



7

韓国語に翻訳された『原発、ほんまかいな』(左)と、ソウル市長の朴元淳さんを囲む PARC メンバー (右)

PARC 自由学校

一出会い・つながり・活動が生まれる場として



2011 年度の集大成！恒例の「自由学校まつり」

1. 企画

2011 年度は 30 クラスを企画し、そのうち 19 クラスが成立しました。

2011 年度の自由学校は、東日本大震災と福島第一原発事故の影響を大きく受けてきました。例年通り 3 月初旬から広報を開始した直後の 3 月 11 日、震災と原発事故が起こり、PARC 自体も被災地支援の取り組みや原発事故に関する情報収集に大きくシフトし、また主要な広報先であるイベントや講演会は中止・延期。世の中全体が先行き不透明で沈鬱なムードとなり、こうした中での広報は困難を極めました。

4 月下旬の段階で、開講を約 1 ヶ月延期し 6 月スタートを決め、受講生募集を継続してきました。一時は自由学校全体の開講も危ぶまれたほどでしたが、無事に開講することができました。ただし、人びとの関心が国内の被災地や原発問題に集中したためか、「世界の学校」への受講数は伸び悩み、また農山村の現場に訪れる「エコを仕事にしよう」等のクラスも不成立となりました。また、新たに企画した昼の時間帯のクラスについては、震災後の対応の中でうまく新規開拓の広報ができず、「コミュニティ・カフェ」クラスを除いたほとんどのクラスが不成立でした。また、半分以上がリピーターで、例年に比べると新規の受講生がやや少なかったことも 2011 年度の特徴です。

秋からは震災と原発事故という現在進行中の切実なテーマについて学び、議論する場を提供するために、「緊急講座」を企画しました。

2. 運営

1 か月の延期をして開講した 2011 年度の自由学校の運営は、申込対応や日程変更の周知徹底に関して、事務局からの連絡・対応が行き届かず、受講生に迷惑をおかけするケースがありました。震災後の混乱の中であったとはいえ反省点が多くあります。

開講後は、受講生の自主的な取り組みや、受講生同士の横のつながりが育っていくように務めてきました。震災と原発事故に際して、被災地支援や、脱原発、放射能汚染と食の安全、また逆に福島県の有機農業者の置かれた苦しい立場など、複雑な問題が私たちの目の前に現れました。受講生の誰もが自らの問題として、何ができるか、どう考えたらいいの

かを他者と語りたいと思い、どのクラスでも絶えずこれらの話題がクラスの中でも外でも交わされてきました。またクラスの講義内容や扱うトピックも、予定した内容に加えて、当然震災と原発と関連した回が多々ありました。

そんな中、例えば「世界のニュースから国際情勢を読み解こう」クラスの受講生から「明日の日本社会を考える会」というサロンのような場が生まれたり、受講生を中心に「野菜にも一言いわせて！さよなら原発デモ」が立ちあがったりと、自由学校ならではのシーンも数多くありました。2011 年度の集大成となった自由学校祭りには、受講生を中心に 100 人以上が参加し、「これからどうする 原発とわたし」「思いやアクションをどうやって広げていくか」というテーマで、車座になって語り合いました。

3. 宣伝・広報

前述したとおり、2011 年度の広報については、社会全体が流動的で予測が立たない状況の中で、短期的な見通しを随時立て、対応していかざるを得ませんでした。5 月は PARC 主催の緊急学習会・イベントをほぼ毎週開講し、その中での宣伝を行なうなどの取り組みがその例です。

しかし 5 月以降、社会全体の混乱がやや収まって以降は、例年通り都内のカフェ、フェアトレードショップ、ボランティアセンター、NGO 事務所などにチラシやパンフレット、リーフレットを置かせていただいたり、ツイッターやインターネットを活用しての広報に精力的に取り組んできました。

申込に関しては、2011 年度よりウェブサイトからの申込・クレジット決済システムを導入し、申込者にとって便利になったことで、好評をいただいています。このシステムは今後、雑誌『オルタ』や AV 作品の購入にも導入していく予定です。

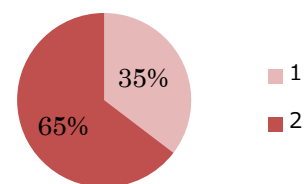
今後の広報の課題として、雑誌掲載など時期を逃してしまいがちなものについて、パンフレット制作の終盤と平行し早めに着手すること、また、自由学校が未だじゅうぶんにリーチできていない、学生や日中に時間があるシニア層の方々に効果的に情報を届けるための戦略を練ることを考えています。さらにはツイッターやフェイスブックなどのソーシャルメディアの活用についても課題です。

2011 年度自由学校受講生分析

カテゴリー	NO	クラス名	人数
ことばの学校	1	超カンタン英語で世界の人と NO BASE !	13
	2	キムとジェンスの「英語で発信！」	15
	3	世界のニュースから国際情勢を読み解こう	9
	4	武藤一羊の英文精読	12
	5	アイヌのことばと文化を学ぼう	11
	6	ケチュア語でひも解くアンデスの文化と文明	中止
世界を知る学校	7	グローバリゼーションと中国の世界戦略	不成立 1
	8	9.11 から 10 年—揺れるアラブ、揺らぐ世界	12
	9	どうなる！？北朝鮮—平和な東アジアを創る	不成立 3
	10	脱成長の時代を生きる	29
	11	パルシック講座 おいしいコーヒーの物語	不成立 5
	12	パルシック講座 香る紅茶に出会う旅	10
社会を知る学校	13	「抵抗」の文化—近未来のためのアクティヴィズム	18
	14	社会的起業—仕事をとおして社会を変える！	25
	15	検察は「正義」か？	15
連続ゼミ	16	ブラック企業 WATCH !	9
	17	目からウロコの『資本論』	8
	18	映像を使って授業をつくろう	4
環境と暮らしの学校	19	東京で農業	41
	20	エコを仕事にしよう	不成立 9
	21	コミュニティカフェをつくろう	36
	22	うますぎてゴメン！元氣になれてゴキゲン！ぶくぶく発酵術	38
表現の学校	23	生きることは表現すること	15
	24	体でリズムを感じて踊ろう キューバンサルサダンス	不成立
お昼の学校	A	アイヌのことばと文化を学ぼう	不成立 1
	B	マツさんのはじめて英語！	不成立 2
	C	歌って覚えるポルトガル語	中止
	D	ケチュア語でひも解くアンデスの文化と文明	不成立 2
	E	生きることは表現すること	不成立 3
	F	コミュニティカフェをつくろう	13
特別講座	社会にモノ言うはじめての一步 活動家—丁あがり！労働と貧困		27
	食と農で世直し！		37
秋の緊急連続講座	「原発を生む社会とたたかう		29
	人びとが拓く、人びとのための復興		不成立 8
秋ツアー：脱原発の地域をつくろう！	全回（4回）通し参加	3	65
	埼玉県小川町を訪ねる	35	
	福島県喜多方市を訪ねる	1	
	千葉県鴨川市を訪ねる	16	
	千代田区御茶ノ水 GAIA を訪ねる	10	
合計（不成立除く）			490

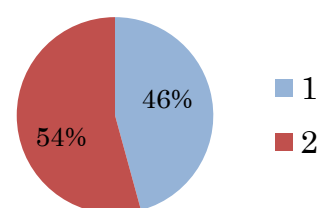
◆男女比

1 = 男性 2 = 女性



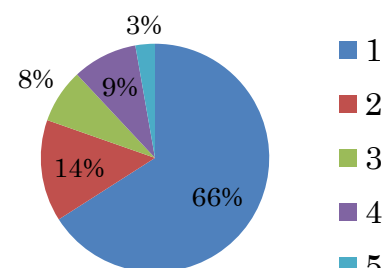
◆受講履歴

1 = 初めて 2 = リピーター



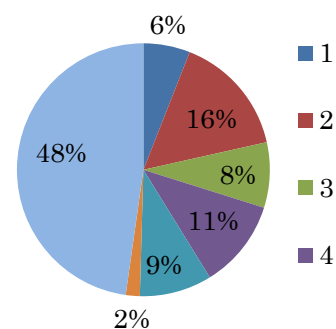
◆地域

1 = 東京都 2 = 神奈川県
3 = 千葉県 4 = 埼玉県
5 = その他



◆年齢

1 = 20代 2 = 30代 3 = 40代
4 = 50代 5 = 60代
6 = 70代以上 7 = 不明



オーディオ・ビジュアル (AV)

一脱原発に向け、考え、議論するための情報発信

1. 全体を振り返って

2011年度、オーディオ・ビジュアル (AV)部門は、オリジナル作品として『原発、ほんまかいな?』と『揺れる主食(飯)』の2点、また翻訳作品として『ハード・レイン』の箱に降り注ぐ放射能』を制作しました。

東日本大震災と、それに続く福島第一原発事故後の5月より、急きょ『原発、ほんまかいな』の企画・制作を開始しました。この作品は8月に完成しましたが、『揺れる主食(飯)』の完成は2011年4月となり、オリジナルビデオを年間2本つくるという目標を達成することができませんでした。

しかしながら、オリジナルの制作と並行して長年の課題だった翻訳作品を完成させたことは、大きな成果です。また2011年度はPARC全体として取り組んだ「国際映画祭2011」にて上映した日本初公開作品『あやしい水ペットボトルの嘘』をリリース予定です(2012年5月予定)。こうした実績から、翻訳者や監修者と協力しながら、翻訳ビデオを制作する体制の基礎が整いつつあります。また、前年度から計画しながら滞っていた旧作品のDVD化も3作品で実現。来年度中にすべてをDVD化する予定です。

2. 作品紹介

①原発、ほんまかいな? (オリジナル)



原発が推進されてきた理由を、専門家とともに検証、その嘘を暴きながら、原発の問題点について基礎から学ぶことができる作品。福島第一原子力発電所の事故を受け、緊急制作しました。

わかりやすく伝えるため、PARCビデオとしては初めてのドラマ仕立ての作品です。さらに、問題点を幅広くカバーするため、75分という長編に挑戦しました。「貧困問題」など、これまでの作品で培ったアニメーションなども意欲的に取り入れることができました。PARCが行なったシンポジウム映像の活用や、オルタとの共同取材など、部門間連携も実現。監修者の細やかな協力もあり、3ヶ月という制作期間で無事に完成させることができました。

この作品は、リリース直後から大きな反響があり、PARC主催の上映会だけでなく、全国各地で自主上映が行

なわれ、広く活用されています。これまでのAV作品の上映先は主に学校現場でしたが、この作品は市民運動グループや小規模な映画祭、オーガニックカフェ等、実に多様な場面で上映されてきました。さらに韓国のNGOの手により韓国語版も制作されました。本作品を含む「原発を問う」セット(4本)の売れ行きも好調でした。

②お米が食べられなくなる日



米を切り口に、食糧貿易と、食糧の自給の意味を考える作品です。TPP交渉への参加が検討されるなか、食糧を貿易に頼ることの問題点を伝え、国内の農業を支えることは、すなわち私たちの暮らしを守ることでありと提言する作品です。

並行して取材を行なうという計画のもと、3年前からあためてきた企画ですが、映画祭などの関係で制作開始が遅れ、年度内に完成させることができませんでした。しかしながら、自由学校「映像を使って授業を作ろう」クラスに参加された教員の方々とともに取材を行ったり、PARCの地方会員の協力で新潟、山形、秋田等の農民のインタビュー撮影をお願いしたりと、教員や会員との連携を深めながら制作するという課題に取り組むことができました。また、専門家からの自立に向け、事務局員が主体となり、監修者とともに制作を行ないました。

③ハード・レイン (翻訳)



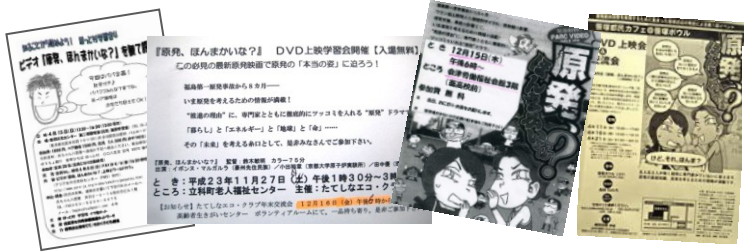
ウラン鉱山を中心に、原発の問題点と放射能の害に迫る「ハード・レイン」は、豪州の監督、デビッド・ブラッドベリの作品です。翻訳者、監修者の協力のもと、2ヶ月で完成させることができました。ただし、オリジナル制作と並行して行なったため、進捗が遅れ、協力者の方々に負担をかけてしまいました。原発事故後、テーマへの関心が高まる中で制作できたため、「原発、ほんまかいな?」とともに、広く上映されています。

3. 宣伝・販売状況

2011年度は、新たな販売拡大には取り組めなかったものの、時宜を得たテーマの作品を発表したことから、メデ

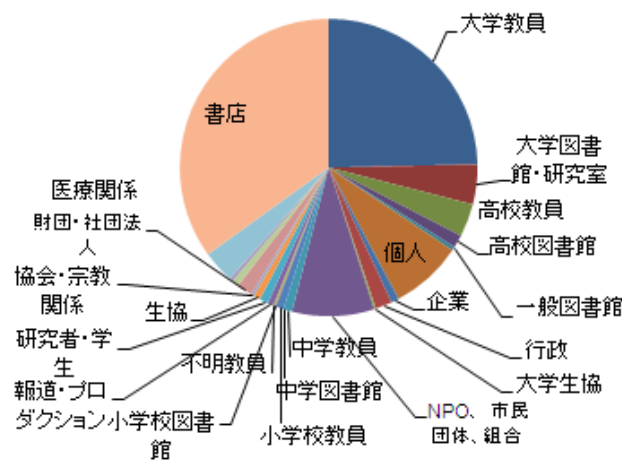
ィアや自主上映会を通じて、結果的に広く宣伝を行なうことができました。とくに、東京の映画館「アップリンク」と共催した上映会は、大手のインターネットメディアに取り上げられ、広く広報されました。また、本編未収録の映像を Web サイトで発信したり、twitter など、新しい形での広報に取り組めたことも成果のひとつです。売り上げ

も昨年を大きく上回り、年間予算を達成することができました。課題となっていた制作中の発送についても、インターンさんをお願いするなど、改善をすることができました。しかしながら、大手書店の新規開拓、発送名簿の拡大には取り組めなかったため、次年度の課題として残っています。

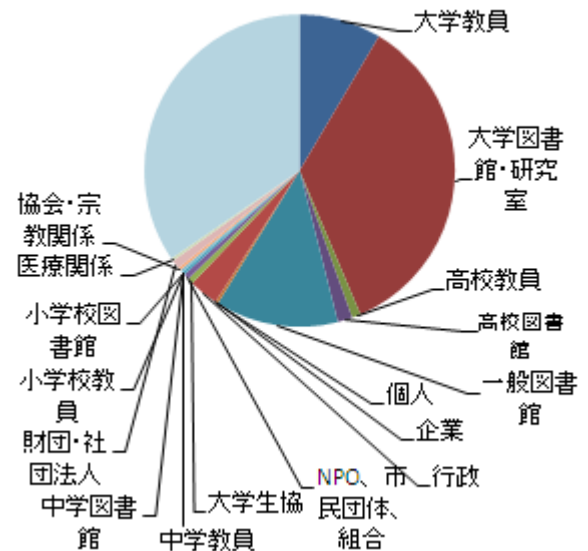


全国各地の自主上映会やイベント、学習会でのテキストとして『原発、ほんまかいな』はご活用されています。写真はそれぞれの主催者が工夫して作成されたチラシです

AV購入者(全体のべ945件)



書店経由購入者(のべ330件)



★2011年度注文数

	計	直販・一般価格	直販・図書館価格	上映料	図書館差額	書店・一般価格	書店・図書館価格	PARC/パルニック会員・一般	PARC/パルニック会員・図書館
単品	825	379	107	4	2	43	257	31	2
セット	120	57	19	—	—	9	24	11	—
計	945								

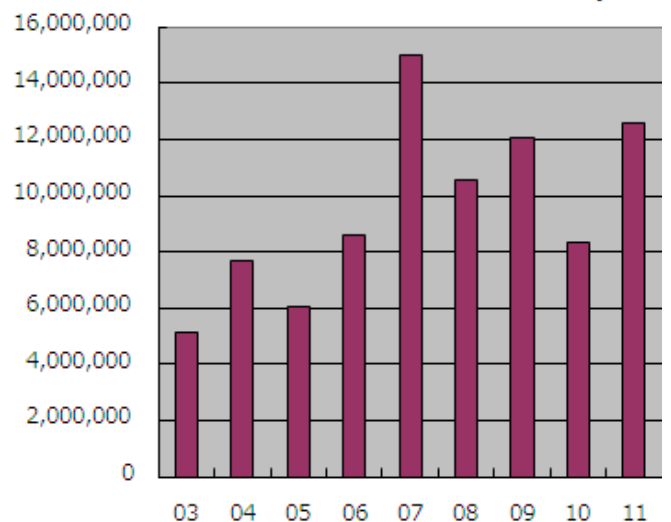
★2011年度単品ベスト5

順位	作品名(制作年)	販売本数
1	原発、ほんまかいな? (2011)	210
2	世界をめぐる電子ごみ (2011)	86
3	ハード・レイン (2011)	75
4	近くて遠い、遠くて近い貧困問題 (2010)	62
5	海と森と里と (2010)	37

★2011年度セットベスト5

順位	セット名	販売セット数
1	原発を問う	72
2	新作 DVD	11
3	日本の現実	9
4	開発と環境を考える	5
4	世界の子どもたちはいま	5

2003~2011年度のAV売上推移(円)



雑誌『オルタ』

震災・原発・国際情報—マスメディアが伝えない内容を発信

2011年度は、より読みやすく、充実した『オルタ』をつくるべく、取り組みを進めた年でした。しかしながら、かねてより課題であった広報の強化には十分に組み込むことができず、今後は販路の拡大、新規購読者の獲得に取り組む必要があります。

1. デザイン・リニューアル

2010年度下半期より検討していた誌面リニューアルを2011年7-8月号から実施しました。特に新たな若い読者・自由学校受講生にとって、手に取りやすいような雑誌を意識してデザインを変更しました。

特に表紙はこれまで全面写真を用いていたのに対し、やさしく、手に取りやすさを意識したイラストに変更し、紙質も若干光沢のあるものから落ち着いた、温かみのある手触りの紙に変更をしました。このデザイン・リニューアルにより、「友人・知人に勧めやすくなった」という声も読者からあがっています。同時に、かねてより大きな課題であった財政赤字を軽減すべく、リニューアルに伴って制作経費も一部削減いたしました。

2. 特集内容

＜現在進行形の議論にオルタナティブな視座を提供＞

2011年3月11日の東日本大震災、ならびに福島第一原発事故以降、多くの議論が相上に載りました。例えば原発の是非、復興のあり方、除染の是非、福島の農家との関係性などです。そして、それらの論点の多くに対して、マスメディアは断片的、あるいは部分的に取り上げる傾向が見られました。『オルタ』ではそうしたマスメディアが取り扱わない方向に光を当て、人びとが十分に議論ができるための情報媒体として特集を企画しました。

中でも、「本気で脱原発」や「3.11から1年」の特集はPARCとしても力を入れてきたテーマであり、集会での講演者や、PARC会員、理事のネットワークを活用した特集となりました。また、『オルタ』をとおして知り合った著者の方にビデオへも出演を依頼するなど、PARCとして取り組んでいる問題に部門を越えて取り組んだ特集となりました。

「復興は人びとの手で」と「みんなが幸せになる税のはなし」はそれぞれ3.11後の復興のあり方やそれを実現するための復興増税の話題に対して、新たな視座を提供する特集となりました。



- 本気で脱原発（2011年7-8月号）
- 復興は人びとの手で（2011年9-10月号）
- みんなが幸せになる税のはなし（2011年11-12月号）
- 3.11から1年—今、何が問われているのか？（2012年3-4月号）

＜国際的に視野を広げる＞

東日本大震災以降、内向きになるメディアが多い中で、PARCとして目を向けるべき海外の事情を取り上げた特集を組みました。「世界をめぐる電子ごみ」と題し、日本から「輸出」される電子ごみの行方や、それによる現地の人びとへの影響を取り上げた号です。ビデオ部門との連携も兼ねた特集であり、直前に発行された同名のPARCビデオの副読本として発行された側面もあります。

また、一時はマスメディアも取り上げたものの、報道がほとんどされなくなった「アラブ革命」後のエジプト、チュニジア、リビアの状況の紹介・分析も行いました。

- 世界をめぐる電子ごみ（2011年5-6月号）
- アラブ革命はこれからだ！（2012年1-2月号）

3. 制作・販売

リニューアルに伴って制作経費が一部削減できたものの、新デザイナーとのやり取りなどの制作環境の変化から、昨年より課題となっていた広報の強化には十分に組み込めませんでした。

全体として購読者数は大幅に減っており、新規購読者獲得が喫緊の課題となっております。そんな中、2011年7-8月号「本気で脱原発」など、時宜にかなった特集については一部売りで成果を上げており、『オルタ』の視点での情報を求めている人たちは多くいると思われます。2012年度は単発売りに耐えうる世相にあったテーマを取り上げつつ、それが年間購読につながるよう営業努力を行うと共に、より幅広い読者層を獲得するための広報に務めます。会員の皆様にも引き続き「口コミ」やTwitterでの「つぶやき」など、可能な範囲でご協力くださいますようお願い致します。

ウェブサイト・ソーシャルメディア (SNS) を使った総合的な発信

◆『PARC 先住民族 Channel』を開設

経済のグローバル化が進む中で、世界各地の先住民族の文化・伝統、その暮らしは変容を余儀なくされています。そこで、失われつつあるそれらの貴重な映像資料や写真を収集し、広く社会へ発信する、ウェブサイト上のアーカイブ『PARC 先住民族 Channel』を解説しました。

インターネット上には毎日世界中で先住民族に関連した動画が次から次へと配信されており、そのすべてを追うのは不可能なほどです。口伝で脈々と受け継がれてきた神話が語られる模様、日常的な料理・食事の風景、あるいは政府や多国籍企業による差別的な弾圧に対する抗議の模様など、インターネット上を巡回するとテーマも地理的な分布も多様な映像を見ることができます。そういった、文章や写真だけでは伝えきれない情報を集約して、検索・閲覧を可能にしたウェブサイトが『PARC 先住民族 Channel』です。

動画の掲載は、YouTube、Vimeo、Dailymotion など、一般的な動画サイトに掲載されている動画へのリンクを、著作権者の許可の下で埋め込むことで行ないます。また、その際にキーワードや動画概要、参考リンクなどの情報を追加することで様々なかたちでの検索や追加調査を可能にしています。新規掲載動画の調査や、著作者への連絡、ウェブサイトへの掲載作業は下記協力者の方々とともに行っておりますが、会員の皆様からの推薦も随時受け付けています。

【協力者・協力団体】

- ・青西靖夫（開発と権利のための行動センター）
- ・上村英明（市民外交センター）
- ・小林邦彦（国際青年環境 NGO A SEED JAPAN）
- ・近藤 綾（台湾語・台湾先住民族研究者）

【サイト URL】

<http://act.parc-jp.org/channel>

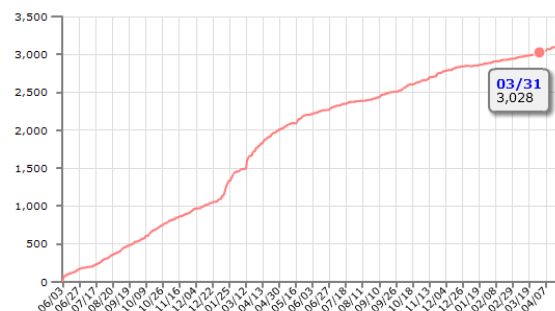


◆UST・ツイッターを利用した発信

ツイッターやフェイスブック等のソーシャルメディア (SNS) は、年々参加者を増やし、NGO 活動や社会運動にとっても重要な発信・交流のツールとなりました。PARCは2011年度、ツイッターやUST(ユーストリーム)などでの発信に力を入れてきました。

2009年6月に開始したツイッターでは、PARCの各部門活動の告知や呼びかけ、また脱原発や反TPP運動の情報発信を中心に日々行なってきました。特に「脱原発」「ブラック企業大賞」や「反TPP」運動などの内容の反応が大きく、2012年3月末時点で約3000人のフォロワーがいます。しかしツイッターでのフォロワー数や反応がただちに直接のアクション参加や申込につながるわけではないため、その分析と効果的な呼びかけ・交流の方法についてはリサーチの余地があります。また集会やイベントではUST放送を徹底して行ないました。PARCのウェブサイトのトップページにもツイッターと動画を埋め込み、気軽にアクセスできるよう努めてきました。UST放送については昨年から引き続き、「反貧困TV」(PARC、レイバーネットTV、OurPlanet-TVとの共催)に参加し、2011年10月の「反貧困世直し大集会」(法政大学)と2012年2月の「反貧困フェスタ in ふくしま」(福島大学)にてUST放送を実施しました。

会員・受講生・講師・友好団体の皆様との情報交換や交流も、ツイッターやフェイスブックを通じて少しずつですが増えてきました。インターネットやSNSを使用していない方々とのデジタル・デバイド(情報格差)の課題を意識・解決しつつ、これまでのツールとは異なるチャンネルでの発信を今後も発展させていきたいと考えています。ぜひ皆様もツイッターでのフォロー等、お願いいたします。



2011年3月31日現在、約3000人のフォロワーがいます。会員の皆様のツイッター、Facebookのアドレスをぜひお知らせください!

ツイッターアカウント

★PARC⇒ @parc-jp

★PARC 自由学校⇒@PARCFS

組織

■ 会員

2012年3月31日現在、568人の会員の皆様がPARCの活動を支えてくださっています。最近ではシンポジウムへの参加や自由学校受講をきっかけに会員となるケースが少しずつですが増えています。会員メーリングリストでのより充実した情報交換を2011年度の課題としましたが、次年度の課題として残りました。

2011年度は、震災後の支援物資プロジェクトに多くの会員からご協力やご寄付をいただきました。支援物資プロジェクト以外にも、2011年度は会員の皆さまからこれまで以上のカンパがPARCの活動全体に対して寄せられています。脱原発の集会やデモ、その他取り組みに対する会員の皆さまからの激励のしるしと思っています。また集会やデモ用に、かねてから会員から要望のあったPARCの旗を作成、会員MLで「一緒にデモを歩きましょう」と呼びかけることが定例化しました。この呼びかけに対し、多くの会員が参加し、またスタッフとしても動いていただくなど、PARC会員の底力を実感した年でした。御礼を申し上げるとともに、引き続きの活動へのご参加・ご支援をお願い申し上げます。

■ ボランティア・インターン

PARCの活動は大勢のボランティアの方々のご協力によって支えられています。現在のボランティア登録者は106名にのぼります。定期的に行う「オルタ」やAV広報チラシ、自由学校のパンフレットの発送作業や、イベント・集会の運営、翻訳、資料整理、広報活動、インターネットへの書込、データ打込、広報物のデザイン、ファイリングなどその内容は様々です。

通常、3~11月にかけてボランティアやインターンへの問合せが増えるため、定期的に月1回のボランティア説明会を開催していましたが、2011年は震災の影響のためか

参加申込が少なく、説明会は数回開催するに留まりました。

気軽に参加できる発送などの短期ボランティアには、今年も大勢の方のご参加をいただきました。また12月に開催した国際水映画祭では当日の運営に2日間でのべ60名ものボランティアの方々にご協力をいただきました。

ツイッターやインターネットの掲示板、検索エンジンでボランティア募集を知り、新規でボランティア活動に参加して下さる方が増えています。また大学、専門学校や定時制高校などでの単位取得のためにボランティアに参加する方も増えています。

初めてPARCに来ていただいた方には活動内容を知っていただくため、PARCの歴史や活動について、簡単にオリエンテーションを行うよう努めました。またボランティア登録者には継続的にボランティア募集のお知らせや、PARCが関わるイベント情報をお送りし、引き続き活動に関わっていただけるよう心がけています。

ボランティア特典の越境チケットプレゼント(作業時間5時間につき1枚プレゼント)も活用していただけるよう、すぐにお渡りするよう努めました。

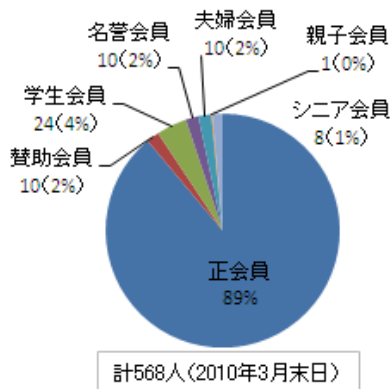
短期インターンは学生を中心に(専修大学、立教大学)3名の受入を行いました。半年以上の長期インターンは希望者がいなかったため、受入はありませんでした。今後は他団体の取組などを参考に、インターンシッププログラムの充実を課題として取組たいと思います。

ボランティアがきっかけで自由学校に参加されたり、集会・イベントのお手伝いをしていただいたりと、ボランティア参加もPARCの活動を知る機会の一つとなっています。会員のみならずぜひお気軽に、PARCでのボランティアにご参加いただけたら幸いです。

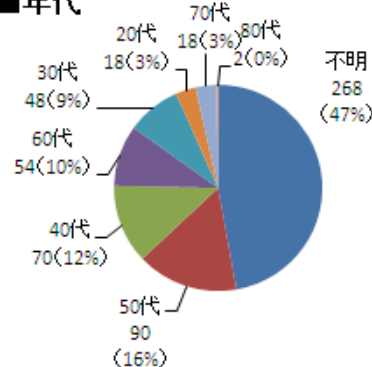


毎年恒例の「PARC 大忘年会」。2011年は会員・受講生・友人などのべ50名以上が参加！

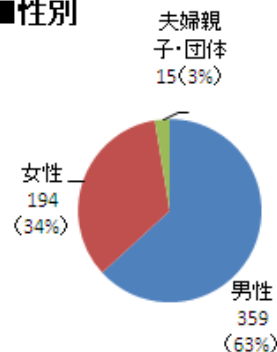
■ 会員種別



■ 年代



■ 性別



アジア太平洋資料センター (PARC)

- 代表理事 大江正章／佐久間智子／細川弘明
- 理事 内田聖子／大塚照代／菅野芳秀／
藤井敦史／穂坂光彦／松本 悟／
宮内泰介／湯浅 誠
- 監 事 市村忠文／中村尚司
- 事務局 内田聖子／高橋真理／小池菜採／
田中 滋／大和田清香／川口沙矢香



事務局スタッフ@2011年 PARC 大忘年会。左から川口(自由学校)、高橋(総務・経理)、小池(AV)、内田(事務局長)、田中(オルタ)、大和田(自由学校)。PARCの活動も世の中もしんどいですが、会員・受講生・他の活動仲間からの励ましと協力があるからこそ、元気に活動しています！



特定非営利活動法人

Pacific Asia Resource Center

アジア太平洋資料センター

〒101-0063 東京都千代田区神田淡路町1-7-11 東洋ビル3F

TEL.03-5209-3455 FAX.03-5209-3453

<http://www.parc-jp.org/> E-mail office@parc-jp.org